

支援者の専門性は高いほうが、良いのかどうか。である。国際協力の現場は、私の想像以上に困難の連続であった。研修や会議を繰り返しても、住民の「住民主体」の理解や、現地スタッフの「自立」の理解が不十分で、プロジェクトが遅延してしまっているからだ。

支援者は「専門性」という矛と「柔軟性」という盾を持って国際協力の現場で立ち向かい、地域住民は地域性と大人数であるということを利用して立ち向かっている、その衝突のあり方がプロジェクト成功の鍵であり、国際協力の現場に必要なことである、と考える。

## 山岳地域におけるトイレ問題 —丹沢大山を例に

陽 田 有 加

1990年代に入り、現在の中高年を中心とする登山ブームが起こって以来、登山人口は大幅に増加した。その社会的背景には、健康志向の強まりと、ヒーリング効果としての期待、そして自然への関心の深まりなどが理由であると考えられる。

近年の社会的背景が理由によりブームになった登山であるが、近年、押し寄せる多数の登山者が引き起こす過剰利用（オーバーユース）と、それに伴う自然破壊が深刻な問題となっている。中でもとりわけ大きな問題となっているのが、山のトイレ問題である。山のトイレ問題は近年大きくクローズアップされており、環境に優しいバイオトイレも誕生している。しかしながら、いくら山のトイレをバイオトイレに替えて利便性を向上させたところで、過剰利用そのもの果たして改善されるのだろうか。

よって本論文では、丹沢大山をフィールドに、丹沢大山地域のトイレの過剰利用問題を調査した。

一般的に、山岳環境における排泄物処理方法は、浸透式、埋め立て式、放流式、焼却・乾燥式、そして環境配慮型形式の5つである。

丹沢大山地域における公衆トイレは、水洗式のトイレに加え、浸透式や環境配慮型形式であるが、中でも特に登山者が多く集まる塔ノ岳公

衆トイレは、環境配慮型形式である。

実際にトイレの利用者の数がトイレの処理能力を越えていないかを調査した結果、塔ノ岳公衆トイレは、トイレの利用者数がトイレの適性処理能力を超えておらず、「塔ノ岳公衆トイレは過剰利用気味ではない」ことが分かった。

丹沢大山は年間100万人以上もの登山者が訪れる。それだけに過剰利用の傾向があり、人びとの排泄物による水質汚染が懸念されていたが、県の努力のもと、過剰利用に伴う排泄物対策は、バイオトイレの設置のお陰で大幅に改善されたように思われる。ただし、期間や程度の違いがあることは否めないで、更なる研究を要する。

登山者によるアンケート結果からは、山岳地域における排泄物処理の実態が分かり、男女による明らかな違いが見られた。ほとんどの回答者が山のトイレへの改善の余地があると答えて折り、その要望として、バイオトイレの普及があった。

しかしながら、環境に負荷の少ないトイレの設置が可能になったことにより、山岳地域におけるトイレ問題がすべて解決するわけではない。登山者たちが、不便や不満を理解しつつ、山におけるマナー、つまり山の環境倫理を理解することが重要である。